



•Tackle Guide
各メーカーから出ているフグ専用竿は、外房（常磐）用と東京湾用の2タイプがある。25号オモリを使う大原エリアでは、胴がしっかりした外房（常磐）用のフグ竿を選ぼう。東京湾用の竿は大原で使うには軟らかすぎるので注意したい。

当日のフグ仕掛け
竿全長1.5m 9:1調子フグ竿
「型を見ましたよ」と船長のアナウンスに各自のシャクリにも気合が入るが、その後が

茨城の一部船宿ではエサをエビに切り替えて対応していたが、利永丸では今シーズン分のアオヤギ確保の目処はついていない。アオヤギエサのほうアタリが分かりやすく、外海のフグ釣りには適していると思う。

開始早々2人の竿が曲がった。まだ薄暗い中、25センチほどのショウサイフグが抜き上げられた。

「型を見ましたよ」と船長のアナウンスに各自のシャクリにも気合が入るが、その後が



▲外房大原のフグは良型主体で好発進

旬の沖釣りをエンジョイ!

今がチャンス!
これから楽しみ!

釣りどきレポート

Best Season Report

日中はまだまだ蒸し暑い日もありますが、朝夕は涼しい日が増えました。寒暖の差が大きくなるため雨具と「もう一枚」ウェアを持参しましょうね。

外房大原港発↓大原〜太東沖 今シーズンは良型主体の幕開け 大原のショウサイフグ解禁!

解禁、それは釣り人にとってキラワードではないだろうか？
しばらくの間手つかずになっていたポイントに仕掛けを下ろす、初心な魚たちがこぞってエサを追いかける、足元のバケツは魚でいっぱい……そんな甘い想像を抱いて釣り場へ向かうのは解禁初日の楽しみだ。

まあ、これまでの経験からそううまく進むことはあまりないのだけど、そんなことに心を躍らせる純真さを釣り人は多かれ少なかれ持っている。9月1日は外房大原のフグ解禁日である。

向かった先は、外房大原港の利永丸。4時前に船のライトが灯り、受付が始まった。利永丸はシーズン中ほとんどフグ乗合で出船しており、中井春樹船長の人当たりのよさもあって、フグ釣りといえ

知得! Tips and Tricks
エサの付け替えタイミングは?

群れが濃いときには、アオヤギのワタもベロもまんべんなくかじられるが、アタリが少ないときはワタの部分だけを食べられてしまうことが多い。何尾か釣っているうちにハリに付いているのがベロだけになってしまうことがあるが、こうなるとアタリが遠くなってしまふ。

この場合は、新しいアオヤギを追加し、常にワタが付いている状態を保とう。ワタがあるかのチェックは、とくに食い渋り時には有効だ。

▲アオヤギエサはワタが肝心

ばこの船というファンも多い。「去年の解禁日は大型がけっこう釣れたなあ」という常連さんたちの会話からも解禁日独特の高揚感が伝わる。

出船時はまだ空は暗いが、ポイントに向かううち徐々に白み始めた。

探り探りの展開
大原近辺のフグポイントは、北は一宮沖から南は岩船沖までと広範囲に渡る。

当然ながら一日すべてのポイント攻めることは不可能で、船長は近況や他船の釣れ具合などの情報からポイントを選ぶが、この日は初日とあって参考データがない。

最初に船長が選んだのは、昨年に実績の高かった航程20分ほどの大原沖水深18メートルのポイントだった。

エサのアオヤギをたっぷりハリに付けて投入。今年はずいぶんアオヤギが品不足と言われ、

「フグが食ってきたよ。空合わせを入れて」と船長のアナウンスにも力が入る。サイズもアップし、30センチオーバーの良型フグも顔を出し始めた。

後半は高活性に
この場所は根掛かりがないので前方に軽く仕掛けをキャストし、オモリを底に着けたままゼロテンションでアタリを待つ。5秒ほど待ってもアタリがなければ、竿先を30センチほどシャクリ上げてから、またゆっくりと底まで落とす。これは空合わせを兼ねた誘いだ。

対して根掛かりがある場所では、仕掛けを底から1メートルほど切って、宙層でシャクリを繰り返すようにする。

根掛かりの有無については、移動後の投入時に船長がアナウンスするので聞き逃さないようにしよう。

シャクリを繰り返しているうちに竿先にグッと重みが伝わった。

竿を立てたままリールを巻く。強い抵抗を見せたと思えばフックと軽くなったりするが、これはフグが上へ泳いでいくからだ。一定速度でリールすると、ブツクリと膨れた



▲初日は大原〜太東沖の水深12〜26メートル前後を探った

船宿information
外房大原港
利永丸
☎0470-62-4601
(詳細は巻末の情報欄参照)

▶料金=ショウサイフグ乗合一人1万円 (エサ別、水付き)
▶備考=予約乗合、3時40分集合。午後一ツテンヤマダイへも出船

中井 春樹船長

フグが浮上してきた。時間がたつにつれて活性が上がってきたようで、アタリが明確になってきた。

穂先を小さくコツコツと引く張るフグのアタリ。すかさず合わせを入れると、小気味よい重量感でリールを巻く手が止められる。釣れ上がったのは30センチの良型だった。

前半はポイント移動を繰り返していたが、後半は移動はなし。流し変えのたびに竿が曲がる状況が続く、お客さんのバケツも埋まっていった。

沖揚がり時間が近くなると船長がまな板と包丁を持って各釣り座を回り、フグを身欠きにしてくれる。

さばいたフグは氷と一緒にクーラーに仕舞う。家に帰ってからは中骨と薄皮を外すだけですぐに料理にかかれるのがうれしい。

この日の釣果はショウサイフグが一人5〜22尾、私も14尾を釣り上げた。良型も多数交じり、初日としてはまずまずの釣果だろう。

水温が下がって浅場に小型の群れが固まってくれば規定の80尾に届く数釣りも期待できるし、根周りではヒガンフグやトラフグも交じってにぎやかな釣りが楽しめるはずだ。

初日は不発だった太東沖26メートルダチの深場ポイントは、4日には30センチ級の良型主体で21〜43尾の好釣果も飛び出した。今年も大原フグの魚影は濃いようだ。